

※今回で連載は終了となります。これを以て『倭詩Ⅱ』の末尾として、夏に第二集を発刊する予定です。長らくお読みいただき、ありがとうございました。(まほろば主人)

連載 最終回



美しき日本、日本の美しさ 其の四 「日本は里山・里海」

宮下 周平

プロフィール 1950年、北海道恵庭市生まれ。83年、札幌に自然食品の店「まほろば」をスタート。無農薬野菜を栽培する自然農園を持ち、オーガニックカフェとパン工房も併設。世界の権威を驚愕させた浄水器「エリクサー」を開発し、その水から世界初の微生物由来の新凝乳酵素を発見。国際特許を取得する。0-1テストを使って独自の商品開発を続ける。著書『倭詩』

写真右上：福岡正信、左下：原田四郎の各氏

鬼追ひし彼の山 小鮎釣りし彼の川 夢は今も巡りて 忘れ難き故郷

(唱歌「故郷(ふるさと)」 高野辰之作詞)

幸せの青い鳥は、何処に居たのだろうか。欧米の向こうの果てに在ると信じて駆け抜けて来た茫々たる150年。

「この国土の美しさ、人の心の清らかさ。あなたの中にこそ至宝がある」と、他国の誰からも讃えられて来た。にも拘らず、私たちは聞く耳を持たなかった。今や、岩走る春の潺も聞こえず、里の秋も紅に燃えず。林立する摩天楼、人々は行き場に倒れ、生きる標を失っている。だが、その項垂れし国民を最後に懐き抱えてくれるのは、矢張り、忘

れかけていた祖国、懐かしき山河ではないか。

「今の日本人のなかで、自分が万華鏡のよな豊富な自然・国土に暮らしていることに気付いている人たちは、どれくらいいるのか」。国連大学のカナダ人、あん・まくどなるど女史は、若き頃より日本中の農漁村を隈なくフールドワークして、東北に居を構え、日本人が里山・里海に生きるべきこれからを訴えられている。かくも恵まれし環境と再び向き合えば、日本は開けない、と。日本は、単なる島国で、資源がないのだから。輸入に頼らねば、自足出来ないのだから。かつて鎖国下の江戸は、見事に自給自足の完結社会を持続させていた。

日本は、国土面積約38万km²に対して海岸線は、約3万4千kmと地球円周の約9割に相当し、22倍の面積を持つオーストラリア大陸に匹敵する。驚くべき長さだ。複雑に入り組んだ海江と多くの島嶼。生息する魚介類の稀にみる豊かさの里海。縄文太古からの漁労採取。これほど恵まれた海産国があるだろうか。そして、日本の森林は25万km²、国土の2/3も占める森林率。フィンランドに次ぐ世界有数の森林大国である。しかもほぼ半分が天然林。この資源を利しない道はなからう。イメージは、前に海を湛え、裏に山を背負い、平地で田畑を耕す半農半漁半林の里山こそ、日本の原風景だった。

マネーゲームの虚業に踊らされ、先行きのない世界金融経済。EUを襲ったそのユーロ危機とは全く無縁だった超優良国家、オーストリアがある。国土は北海道とほぼ同じ、森林面積は日本の約15%に過ぎない。が、日本の年間生産量よりも多い丸太を産出し、発電燃料のエネルギー環境問題を材木で解決し、森林先進国として持続可能な社会を、経済的自立と伴に構築した。それが、この日本で出来ない訳がない。

その自立している町が、日本の片隅にもあった。北海道、下川町。平成20年、森林共生低炭素社会の創生で「環境モデル都市」に指定された。

昭和28年、下川町は、当時3150万円の赤字財政、このままでは北海道初の再建団体に指定される状況にあった。おそらく、誰もがたじろぎ、何事も控えるだろう。しかし、原田四郎町長は、果敢に打って出た。町としては巨額の8800万円を借金して、国有林1200haを買い取ったのだ。尋常ではない。原田氏の眼には、遠く大計が見えていた。1年に50haの山の木を伐採し、植林する。それを60年間続ける。トド松は還暦を迎えて伐れる。そのためには3000haが必要となる。この「法正林思想」を実現させて、山を永続的に循環させ、町民を自立させるには、必要最低限の面積であった。ために、今無理しても買い取れば、後々の楽になると踏んだのだ。

産業・自然・環境・社会を包括したこの原田システムは、21世紀型地域モデルとなり、Iターン、Uターンを増やし、雇用促進や関連事業を生み、町は活気に沸いた。「人の見えないところを成して行く。私は100年先を見て、今見えない根を張っているのだ」と。

国政も、同じ視点が要る。エコや環境の言葉もなく、国も誰もが気付かぬ60年も前に、この雪深き一地方が着手した大眼力に、驚異と敬意を表するのだ。ここに、日本の未来図があるではないか。

「これからは、右肩下がりの年頭、社内で私はこう宣言し、「降りて行く生き方」で「小國寡民」の社是を本気で実現しよう」と誓った。世界混迷の元凶は、経済優先の金融資本の論理であり、土から遊離した実体のない貨幣価値によって、人類は翻弄されて来た。今、多くの心ある人たちがそれに気付き始めている。

その時、まほろば農園のある小別沢地区で、長老たちの跡継ぎ問題をきっかけに、札幌の唯一残された里山としての新しい見直しが提案された。農業、山林、放牧、工芸、醸造、学舎、環境保全等々、この狭い里村での自給が完結する循環生活を呼びかけ、計画したのだった。小さくともそこを足場として、今の閉塞した国を突破するヒントが、四方の山林田畑に埋もれていたのだ。日本の地方に残る既存の伝統的循環システム。これを伝承し、再興することが、次代を拓く「里山資本主義」なるキーワードだ。

まほろばの原点ともいえる自然農法の父、故福岡正信翁は「国民皆農」運動を提唱していた。「終戦直後は人口の7、8割が農民だった……。私は、実は、国民皆農ついでのが理想だと思っている。日本の農地はね、丁度面積が一人当たり一反(0.1ha)ずつあるんですよ。どの人にも一反ずつ持たす。家建てて、野菜作って、米作れば、5、6人の家族が食えるんです」(「わら一本の革命」)

ここに、里山・里海の素朴な営みがある。日本再生の縮図がある。人間性復活の鍵がある。自分の足で立つ力こそ、国の底力である。国力は自給率なのだ。1000兆円を超える借金大国日本。この国家破綻の死に体を救うには、根底の革命が要る。「小さき一村の革命」。一極集中した都市国家の出口の見えない先。これを解決するのが、地方文化への移行だ。世界でも有数な海と山の資源を生かした政策より他に、国家再建の大道はない。

地方に帰る。地域に生きる。この小国を集めて日本とする。この「帰郷運動」によって、美しい国土を守り、新たな国が甦らんとする。青い鳥は、掌に舞い降りた。(おわり)

(長らくのご愛読ありがとうございました。)